

# 「希望格差社会」を超えて

## Y校と鶴工の生徒たちへのインタビューから

近年、10歳代後半から20歳代の若者たちの生活実態を語るとき、必ず登場するキーワードが「ニート」、「フリーター」、「引きこもり」だ。

「労働経済白書」(2004年)によると、アルバイト・パート就業者が主である「フリーター」は217万人、この10数年で急増した。また無業で就職活動をしていない若者たち「ニート」や社会的な関係を絶って自宅(自室)に閉じこもる「引きこもり」も増加しているという。

また「努力しても報われない」という意識が広がっており、将来に希望を持てる人と将来に希望が持てない人との心理的な格差も拡大しているという説もある。でも、それって本当なのか？

今は、横浜のティーン・エイジャーたちにとって受難の時代だ。定職について

まじめに働いていけば、収入が右肩上がりが増え、生活も安定した成長・拡大型の社会は終焉し、そのうえ今後半世紀は続くと思われる超高齢化社会を支える希少な働き手としての過重な期待がかかる。さらに、もともと人口が少ないだけに、団塊の世代やそのジュニアたちが10代だった時のように、街であまり見かけないし、世の中に対して自己を主張する機会もそれほどあるとは言えない。

そこで、今の10代の若者達が何を考えて、生きているのか、特に学校生活や将来の仕事のイメージについて市内の高校生たちに直接話しを聞いてみることにした。

Y校と鶴工の若者たちに聞く

取材に訪れたのは、Y校横浜商業高

校と鶴工(鶴見工業高校)だ。

商業、工業という、専門学科高校に通う若者たちを選んだのは、この若者たちは、普通科の高校生たちより、入学したときから、より具体的な職業イメージを抱いて学校に通っているはずだし、考えているはずだからだ。

Y校が、開港場である北仲通りの一角に創立されたのが1882年(明治15年)。横浜商人たちが発起人となり、当時の欧米諸国に対する貿易不均衡を是正できる日本人の育成を目指して設立された。開校以来これまで、横浜経済界にさまざまな逸材を送り出し、Y校の名で横浜市民に愛されてきた伝統校である。

貿易やビジネスに関する学習もさることながら、卓球、野球、剣道などのスポーツ活動でも全国レベルの実績を誇っている。昔から就職も不況知らずで、こ

こ数年でも50名の就職希望者に対して、一部上場企業も含めて300社以上の求人が続いている。ただ近年、進学率が上昇しており1995年には60%だった進学率が2005年には80%を超えた。

鶴工は、1936年(昭和11年)に創立された。二・二六事件が起こった年である。この当時すでに工場の集積が進んでいた横浜工業地帯を支える中堅のエンジニア、すなわち戦前からの工業立国・日本の屋台骨を支える人材の育成を至上命題にして生まれた学校である。

現在の生徒の進路は就職が約7割、大学、専修学校への進学が約3割となっている。求人企業数は、ここ何年か600社ほどであったが、平成17年度は、景気を持ち直しが本格化したことから、178名の就職希望者に900を超え企業から求人があった。

Y校では

横浜商業高校商業科3年の齊藤さんと浅井さんにインタビューをした。

なぜY校を選んだのですか

齊藤 小学校の頃から高校を卒業したら働くつもりで、高校は商業科へ行くと決めていた。4人兄弟で、お兄ちゃんもお姉ちゃんも働いていて、働く姿にあこがれていたから。Y校を選んだのは中学2年のとき。伝統もあるし、県下でトップクラスの学校だから。

浅井 Y校を決めたのは、中学2年のときに先輩に誘われてY校の文化祭に行つてとても雰囲気良かったから。それと中学のときの技術家庭の時間のコンピュータの実習で、情報処理に興味を持った。さらに体験入学を試みて、やっぱりここだと決めた。

Y校の授業はどうですか

浅井 簿記や帳簿、小切手の書き方など商業科目は実技が多いので、一夜漬けのテスト勉強では、単位はとれない。1、2年の頃からこつこつ学んで身につけていくしかない。また、プレゼンの仕方やビジネスマナーなど、社会に出て即、役に立つ科目が多いのも普通科とは違う。

齊藤 観光プロモーション活動力、横浜お試しいろ八八(計画)を体験して本当に勉強になった。横浜のことを全く知らない地方の中学生に、横浜をPRしなければならぬので、横浜の街を歩いて、横浜について本当に勉強した。またプロモーションビデオのナレーター役をしたり、FM横浜やラジオニッポンなどの番組に出演して、横浜お試しいろ八八(計画)の活動について紹介するなど、学んだことをどのように人に伝えるかという経験もした。特にラジオ番組は、アドリブで答えなければならぬので、緊張したけれど、地元の中学の同級生とかにラジオを聞いたよと言われると、照れくさいけれどうれしかった。

齊藤 小学校の頃から高校を卒業したら働くつもりで、高校は商業科へ行くと決めていた。4人兄弟で、お兄ちゃんもお姉ちゃんも働いていて、働く姿にあこがれていたから。Y校を選んだのは中学2年のとき。伝統もあるし、県下でトップクラスの学校だから。

ニートや引きこもりについてはどう思う？

齊藤 うちは、兄弟が4人なんで、お金の余裕もないし、子どものうちから、早く働いて自立しなければという自覚があった。いつまでも働かなくてもいいと親が甘やかしてくれる環境ではなかった。

浅井 これだけ世の中がどんどん変わって動いていく時代に、なにもしたくないと家に関じこもっているのは、時間があったらいいと思う。免許を取りに教習所に通っているんだけど、「俺たちニートだよ」といって、20代前半の人たちが、暇をもてあましてずっと教習所でたむろしている。聞くと教習所のお金も親から出してもらっているという。私は時間をやりくりしながらアルバイトをし、学校で勉強し、それで教習所に通っている。ニートの人たちとは、時間の感覚が全然違つ。

将来の進路は

齊藤 勤め先は、コンピューターのシステム構築をする会社の経理事務。簿記や会計などの学校で学んだことが実際に役立ちそうだし、また「イロハハハ」の授業で、いろいろな人たちと出会って学んだことは、これから生きていく上できつと大きな財産になると思う。

浅井 進路は看護師の専門学校。昨年、祖父ががんで亡くなったときに付き添って看護してくれた看護師さんの姿を見て決めた。自分の肉親でもないのに、だれに対しても献身的にそばを置きと処置する姿がすごいと思ったし、これが本当の「プロ」だと思った。それで、資格もなく

看護のやりかたもわからず、ただ祖父の手をさするだけの自分が悔しくて、自分も看護師になると思った。Y校で学んだ科目とは直接に関係のない仕事だけれども、この学校で学んだ仕事のプロになるための心構えは、生かせると思う。

（「横浜お話しイロハハ計画」については第3部第3章「横浜の再発展に向けた総合プロモーション」参照）

鶴工では

鶴見工業では、3年電気科の鈴木先生のホームルームの時間にお邪魔して、30人を超えるクラスの生徒たち全員男子から話を聞いた。

まず驚くのは、彼らの学校にいる時間の長さだ。午前8時35分から午後2時50分までが、正規の授業時間だが、遅くまで学校に残って実習のレポートを書いたり、夏休みでも学校にきて資格試験の勉強をする生徒が結構いるという。一般教科はさておき、とにかく実習のある専門科目が大変で、「学校にこもる」、「鶴工生に夏休みはない」というのが彼らの実感だといふ。

さらに驚くのは、こうした放課後や夏休みの学習を、個々の生徒がバラバラに自習しているのではなく、数人

のグループで担任教師と一体となつて行っているのである。その結果、「自分の親父よりも鈴木先生という時間の方が長い。（笑）」という発言が示すとおり、教師と生徒との関係もきわめて密になるし、クラスの団結力が自然と高まっていく。だから学園祭なんかもクラスの有志が、徹夜で準備する。「成長・拡大期」の日本を支えた企業人を育てるシステムの原点にある、「同じ釜の飯を食った仲間」ならではの共同体的心性がまだ息づいているのだ。

そして、どんなところに就職が決ま

ったの」という質問に対して、「言うてやれ、言うてやれ」と、はやされながら自分の希望通りに決まった就職先の名を次々とあげてゆく生徒たち。実際、エンジニアとしての土台ができている場合は、企業の評価も高く、入社1年目で100万円を超えるボーナスをもらつる生徒もいるという。

新しい高校・大学教育のありかたを求めて

社会の成長・拡大期、10歳代の若者たちの多くは、どのような職業につくかというよりも、どのような高校・大学に入学できるかということに悩んでいた。「学校で学んだことが社会にでてから、なんの役に立つのか」ということを問うことは、ナンセンスであった。実社会で生きていくためのもろもろのスキルは、実社会で学べばよかった。

しかし終身雇用制が崩壊し正社員が激減、会社によりかかっていけば生きていけた時代は過ぎ去った。

『13歳のハローワーク』という本がベストセラーになったが、若者たちがいま自立した職業人になっていくためには、なるべく早く、自らの職業人としての具体的なイメージを設定し、それに向けてなにを学び、どのようにスキルアップしていくのかを主体的に選択することが問われているのだ。この市民生活白書では若者の自立を支援する、新しい高校・大学教育のあり方について考える。



鶴見工業高校の授業風景